

編集後記

われわれはここについて早期食道癌の特集号を手にしたというのがいまこのあとがきを書いている率直な感想である。この号がよいキッカケになって、早期食道癌の診断学が太い幹に成長することを期待したい。食道でもどんどん早期癌をみつけようではないかという気運がもりあがってほしいものである。

残念なことには、現在まで集計されている早期癌は58例に過ぎない。とはいえ、今後2、3年にして1施設で10例、20例と症例をもつようになってくれば、この診断学はすっかり姿を変えてしまうかもしれない。

この号は早期食道癌診断学の mile stone となると思われるが、座談会の内容はその完成が容易でないことを示している。

今迄は食道外科医にすっかりおまかせして、われわれ消化器内科医は食道の細かな病変をきちんと診るという基本的な姿勢も放棄していたのではなかろうか、少なくとも私はそうだったと反省している。

食道のX線診断、内視鏡診断もまだまだこれからという分野である。しかしすでに目標の1つは高々とかけられているわけである。多年にわたる辛苦のすえ、食道癌の外科手術は大きく前進した。かつてはごく特定の外科医しか扱えなかった食道外科学の今日の普及ぶりが端的にそれを物語っている。

あとは内科側も発奮して早期食道癌の状態でみつけただけである。みつけたあとの処置はちゃんとルールがしかれている。

早くみつけるにはどうすればよいか。その回答は本号から十分くみとれよう。

＜竹本 忠良＞

＜編集＞ 早期胃癌研究会